

# 障害者雇用に関する概念的考察：目的・技術・仕事・遊戯性

高岡英氣

## I 緒言

1960年に制定され、その後数十年に渡って改正が行われてきた「障害者の雇用の促進等に関する法律」（通称「障害者雇用促進法」）は、障害者の法定雇用率を具体的に設定した雇用義務規定である。この規定は一定の成果を上げており、厚生労働省「障害者雇用状況調査」によると、2006年度は民間企業における障害者実雇用率は1.52%、障害者雇用数は283,750.5人であったが、2018年度は2.05%、534,769.5人となっている。

一方で、こうした規定の限界を示すような事例も起こっている。2018年、厚生労働省を端に発覚した障害者雇用人数の水増しは、内閣府や総務省、国土交通省など全体の約8割にあたる28の機関で3,700人に及んだ（毎日新聞、2018）。法定雇用率を下回ると納付金のペナルティが課せられる民間企業に対し、ペナルティがない行政機関が不適切な算定をしたことも相俟って大きな社会問題となった。

この問題の本質には、組織における障害者と健常者の協働の困難さがあると考えられる。近年、企業の社会的な責任が問われ、経済性追求一辺倒の企業活動は許容されない時代になりつつある。とはいえ、株式会社は定義上、利益の株主への還元が組織目的である。したがって、企業活動の一義的な目的はやはり利益の増大であって、その最小単位である各職場での協働においては、生産性の向上が最重視されることになる。

そうした環境においては、職場のマジョリティである健常者が、本音のレベルで障害者の存在を疎ましく思い、「足手まとい」と感じてしまうこ

とは、十分想定される事態である。たとえ、雇用促進法のような法令により障害者との協働が推奨されようとも、彼らの主観には「偽善」、「上からの押し付け」といったネガティブなイメージが伴いかねない。納付金のペナルティが課せられない行政機関において上記の問題が発生したことは、そうした事態が存在することの証左と言えるだろう。行政機関とて業務における一定の生産性の向上を要請されるのであれば、「足手まとい」である障害者の雇用を敬遠したことの帰結として「水増し」が為されたと考えられるからである。

2013年に制定された障害者差別解消法では、「全ての障害者が、障害者でない者と等しく、基本的人権を享有する個人としてその尊厳が重んぜられ、(…) もって全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に資することを目的とする」という理念が謳われている（内閣府，2013）。こうした理念に鑑みれば、法令の圧力によって障害者と健常者がいわば「無理やり」協働を担うといった事態は、共生社会の実現とはかけ離れたものであると言えるだろう。

本稿は、こうした雇用環境の現状を改善するための出発点としての「そもそも論」を提起することを目的とするものである。かつて哲学者カントは「概念のない直観は盲目である」と言った（カント，1961）。「障害者雇用」という現象に向き合う際にも、いくつかの「根本的な概念」について考察する必要があると考える。本稿では、以下の手順に従って議論を進めていく。まず、雇用された障害者が担うことになる営みの「目的」とはいかなるものとして捉えることができるかを、スポーツの事例をメタファーとして考察する。次に、そうした営みにおいて要求されることになる「技術」という概念の本質について、ハイデッガーの議論をベースに検討することで、障害者と健常者の協働の困難性を指摘する。さらに、前節において示された困難性を克服する手掛かりとして、「仕事」と「遊戯性」につ

いて考察を深めていく。最後に、前節で提示された「遊戯性」が、障害者と健常者の協働の実現につながる可能性を示すため、サッカー元ブラジル代表のガリンシャの事例を検討する。

なお、本稿では「障害者」と「健常者」という言葉を多用するが、当然のことながら現実には人々を二項図式的に区別する普遍的な境界など存在しない。二つの言葉の使用はあくまで便宜上のものである。

## Ⅱ 目的としての「達成」の原理

障害者雇用の問題を検討するための出発点として、アメリカの政治哲学者マイケル・サンデルの議論から一つの考察を導きたい。サンデルはその著書の中で、車椅子のチアリーダーについて触れている (Sandel, 2009)。テキサスの高校でフットボールチームのチアリーダーをしていた1年生のコーリーは、脳性麻痺で車椅子であったが、元気いっぱい応援が注目され、選手や観客を大いに沸かせ大人気であった。しかしシーズン終了と共に、他のチアリーダーの親たちからコーリーの活動への反対運動が起こった。親たちが反対した理由は次のようなものであった。チアリーディングというのは、高い身体能力と演技能力に裏打ちされた優れた体操の技術により、開脚や宙返りなどを披露することが目的であり、それこそが、チームにおける「賞賛と見返りに値する美德」と考えられる。したがって、それが叶わないコーリーはチアリーダーとしてふさわしくない。

結局、車椅子チアリーダーのコーリーは、チームを追われることとなった。サンデルは、この問題が、チアリーディングという社会的営みの目的とそれに伴う名誉が、コーリーによって再定義されたことによって生じたものであると指摘する。すなわち、チアリーダーの親たちの考えに象徴される既存の定義では、優れた体操技術によって魅せる活動がチアリーディングの目的であり、賞賛と見返りに値する美德であると考えられるのに対

し、コーリーによって示唆された新たな定義では、開脚や宙返りの代わりに、生き生きとした姿で、誰よりも大きく明るい声援を送ることにより、選手を鼓舞し、観客を感動させることがチアリーディングの目的とされるのである。

だが、結果としてコーリーが追放されたことから分かるように、既存の定義が指し示す「目的」は、チアリーディングを含むスポーツ文化に対する人々の認識に根強く内在するものであると考えられる。それは一体いかなるものであるのか。この問題について考察を深めるために、以下ではベロ・リガウアの『スポーツと労働』の議論を参照する。

リガウアの議論の展開は、ホルクハイマー、アドルノ、ハーバーマスらのいわゆるフランクフルト学派の批判理論に依拠するものであり、『スポーツと労働』の主眼はスポーツ批判であった。

リガウアは同書の冒頭で、「スポーツは自立的な行動システムではない」と述べ、「スポーツは初期の資本主義のブルジョア社会に起源をもつ多くの社会的な事象と並行関係にある」という見解を示す。規律・訓練、権威、競争、達成、目標を目指す合理性、組織化と官僚主義化などの基本的特徴は、現代の産業社会の生産的労働と同様にスポーツにも観察される、というのである（Rigauer, 1981, p.1）。

彼の議論の根幹をなすキー概念は「達成原理〔achievement principle〕」と呼ばれるものである。リガウアが言うには、経済的に組織された産業社会では、市場における競争がなされ、それが達成への志向を生む。そして、達成が、高い生産性、経済的な競争、物質的報酬、職業的実践、社会的な昇進可能性に関わる行動の社会的に認められたモデルとなった。この達成原理は、クーベルタンの〈より速く、より高く、より強く〉に象徴されるように、トップレベル・スポーツの中に組み込まれ、まさに近代スポーツの典型的な性格を形成していったのである（Rigauer, 1981, pp.14-17）。

さらに、人間の手を離れて社会的な強制力をもってきた達成原理は、一

つのイデオロギーとなる。その実現のために〈合理化〉という概念が産業社会の重要な指針となった。その結果、スポーツの世界にも、専門化、階級化、数量化、細分化、官僚主義化、役割システム化、科学化が進展する。そして社会的労働と同様に、競技者個人の能力は、抽象的で数量化された商品へと形を変えられ、その商品はそれを生み出した人間から離れて、特別な市場において交換可能となる（Rigauer, 1981, pp.18-19）。

リガウアは、こうした達成原理の支配は、基本的にトップレベル・スポーツの領域についてのみ妥当するものであるとしながらも、今日、トップレベル・スポーツがスポーツ全体のシステムに対し影響力をもっており、こうした傾向はスポーツ一般にも当てはまるようになってしていると述べたのである。

こうしたリガウアの議論を先のコーリーの事例に引き寄せるならば、彼女を排斥したチームメートの親たちが内面化していた（と考えられる）、「高い身体能力と演技能力に裏打ちされた優れた体操の技術により、開脚や宙返りなどを披露する」といったことをチアリーディングの目的とする認識は、まさに〈より速く、より高く、より強く〉に象徴される達成原理と相通じるものであろう。そして、現代スポーツに広く浸透する達成原理は、まさにコーリーの事例が象徴する障害者雇用問題の困難性に通底するものではないだろうか。その背景にある企業活動における一方的な経済性追求は、まさにこの達成原理によって駆動されているように思われるのである。

### Ⅲ ハイデッガーの技術論

われわれはこうした困難性を乗り越えるために、果たして何ができるのか。そうした難問にすぐに答えることなど到底できない。したがって、以下ではそのための手掛かりを探るための考察を試みたい。ヒントとなるの

は、かの大哲学者ハイデッガーの技術論である。

ハイデッガーは、1953年にミュンヘン工科大学で行われた講演、「技術への問い」の中で技術の概念に対する考察を述べている<sup>1)</sup>。

ハイデッガーは技術の本質を考察する上で、古代ギリシャの四因説から出発する。通俗的な理解においては、技術は何らかの目的のための手段〔Mittel〕である。手段とは、何か別のものを達成するためのものであり、その本質は何らかの結果をもたらすための原因〔Ursache〕であると言える。

数百年来、哲学は四つの原因があると教えてきた。「質料因〔causa materialis〕」「形相因〔causa formalis〕」「目的因〔causa finalis〕」「動力因〔causa efficiens〕」である。銀皿の制作を例にするならば、材料としての銀は質料因、その材料が収まっていくところの形態が形相因、完成した銀皿を用いて捧げ物を供える儀式が目的因、出来上がった現実的な皿を実現する銀細工師が動力因、ということになる（ハイデッガー、2013, pp.12-13）。

これら四原因は、われわれ現代人の感覚からすれば、他のものに対して「責めを負う〔verschulden〕」もの、というふうに理解する方が適切である。例えば、銀は、皿の質料としてその皿に対して責めを負っており、銀皿を用いて捧げ物を供える儀式は、その皿に対し、清祓と喜捨との領域に限定する目的因としての責めを負っている。「四原因は責めを負うことの相互に属しあう四重のしかた」なのである（ハイデッガー、2013, p.14）。

そして、それら四原因が責めを負っている等のものは、「捧げものの用具としての銀の皿が手許にあり、用意されていること」、すなわち銀の皿の「現前〔Anwesen〕」である。責めを負うことは、そのように現前を誘い-出す〔An-lassen〕、すなわち「誘発〔Veranlassung〕」という根本的特徴をもつのである（ハイデッガー、2013, p.18）。

では、そうした誘発の四つのしかたの働きあいを統一的に支配する原理

は何か。この点についてハイデッガーはプラトンの言を引用しつつ、あらゆるそうした誘発は、古代ギリシャにいうポイエーシス [ποίησις]、すなわち「こちらへと-前へと-もたらすこと [Her-vor-bringen]」であるという。古代ギリシャ人にとってポイエーシスは、手仕事の制作、芸術、詩作に止まらず、開花のような自然的な生成といった概念を内包しており、それらはいずれも何らかのものをこちらへと-前へと-もたらす、という共通性を有している（ハイデッガー, 2013, pp.19-20）。そして彼の議論は、この「こちらへと-前へと-もたらすこと」の本質に存する「開蔵 [Entbergen]」という概念に行き着く。

(…)〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉は、自然においてであれ、手仕事においてであれ、芸術においてであれ、どのようにして生起するのか？誘発の四つのしかたが働いているところとしての〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉とは、なんであるか？誘発は、そのつど〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉において輝き現れへと至るものの現前にかかわってゆく。〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉とは、伏蔵性 [Verborgenheit] からこちらへと、不伏蔵性のうちへと、前へともたらす [vorbringen] のである。〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉がそれ自体の固有性を出来させるのは、ただ伏蔵されたものが不伏蔵的なものに至る場合だけである。このように不伏蔵的なものに至ることは、われわれが開蔵 [Entbergen] と名づけるものにもとづいており、またそれのうちで揺れ動いている（ハイデッガー, 2013, pp.20-21）。

伏蔵から不伏蔵へと至る開蔵は、〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉の本質に存するものである。ハイデッガーは、古代ギリシャ人がこの開蔵を表現するためにアレータイア [ἀλήθεια] という語を用いており、これは現代ドイツ語でいう真理 [Wahrheit] に翻訳できるというのである。

ハイデッガーは、この開蔵にあらゆる生産的制作の可能性がもたづいており、技術は単なる手段ではなく、まさにこの開蔵の一つのしかたであり、そして技術の本質は、開蔵の領域、すなわち真理の領域に関わるものであるという（ハイデッガー、2013, pp.21-22）。

このことについての考察を深めるため、ハイデッガーは技術〔Technik〕という名称の淵源、すなわち古代ギリシャのテクネー〔τεχνη〕の概念に立ち返る。古代ギリシャにおけるテクネーの概念には二つの本質的な特徴があった。

一つは芸術・特に詩的なものに関わるという点である。当時のテクネーは、単に手仕事の行為や技量のための名称に過ぎぬのではなく、高尚な技・芸術のための名称であった。テクネーは、〈こちらへと-前へと-もたらしこと〉、すなわちポイエーシスに属するものであって、それゆえにか詩的なもの〔etwas Poietisches〕であった（ハイデッガー、2013, pp.22-23）。

もう一つの特徴は、それが真理に関わるものであったということである。テクネーは、エピステーメー〔ἐπιστήμη〕と並んで熟知〔Erkennen〕のための名称であった。例えば、家や船を造る大工は、誘発の四つのしかたという観点にしたがって〈こちらへと-前へと-もたらしもの〉を開蔵する。この開蔵はあらかじめ家や船の形相と質料とを、「完全に観取〔erschauen〕され仕上げられたものに向けて収集するのであり、そのものから製作のしかたを決める」（ハイデッガー、2013, p.24）。このような意味においてテクネーは、真理を認識することの一種であった。

こうした考察を踏まえ、ハイデッガーは以下のように結論づける。

テクネーにおいて決定的なことは、作ること〔Machen〕や道具を使って仕事すること〔Hantieren〕ではないし、さまざまな手段の利用ということでもなく、すでに述べたような開蔵ということなのである。製作



としてではなく、このような開蔵としてテクネーは〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉の一種なのである（ハイデッガー、2013、p.24）。

技術は開蔵のひとつのしかたである。技術がその本質を発揮するところとは、開蔵と不伏蔵性とが、すなわちアレーティアが、すなわち真理が生起する領域なのである（ハイデッガー、2013、p.24）。

このように、技術概念を語の淵源に遡ってテクネーとして捉えるならば、そこには芸術・詩そして真理といった領域に関わる特性が見て取れるのである。

一方で、ハイデッガーは現代技術に関して、それを同じく開蔵の一種であると述べた上で、これと異なる特性をもつものとして捉える。

現代技術をくまなく支配している開蔵は、いまやしかし、ポイエーシスの意味での〈こちらへと-前へと-もたらすこと〉としてその働きを展開することはない。現代技術のうちに存する開蔵は一種の挑発〔Herausfordern〕である。この挑発は、エネルギーを、つまりエネルギーそのものとして掘り出され貯蔵されうるようなものを引き渡せという要求〔Ansinnen（無理難題）〕を自然にせまる（ハイデッガー、2013、p.26）。

ある山が鉱山として特定されれば鉱石の採掘へと挑発される。かつては農夫の人力によって育て手入れされた農地も、機械化された農耕技術によって挑発され、これまでとは別のしかたで用立て〔Bestellen〕られる。かつて詩人ヘルダーリンの讃歌の中で詠われたライン河も、現在は水力発電所が据えられ発電のための水圧供給者として用立てられている。現代技術はこうした形で自然を調達する〔stellen〕のである。このように、現代

技術における開蔵は、挑発という意味での調達〔Stellen〕の性格をもっている。

そして、こうした挑発する調達によって存立するものに固有のあり方は、「即座に使えるように手許にある」という意味で、用立てられうるようにあることである。ハイデッガーはそのような存在のあり方を用象〔Bestand〕と名づける（ハイデッガー、2013、pp.29-30）。

現代技術においては、さまざまなものが用象として挑発・調達されうることになり、人間もまたその例外ではない。ハイデッガーはそうしたあらゆるものを用象という形で挑発・調達していく開蔵のあり方に、「ゲ-シュテル〔Ge-stell〕」という名称を与え、それがまさに現代技術の本質であると述べる（ハイデッガー、2013、p.36）<sup>2)</sup>。

倫理学者の加藤尚武は、このゲ-シュテルの概念について以下のように説明する。

ハイデッガーの見た近代技術社会では、あらゆる物事が「……立てる」(…stellen)という強制、利用、要求の関係で成り立っている。どこにも発信源はないのだから、「……立てる」というお化けが一人歩きしているようなものだ。「取り立てる」(注文する、返還を要求するbestellen)、「引っ立てる」(調達するgestellen)、「喚び立てる」(出頭を命ずるzustellen)などなど、さまざまな「……立てる」のお化けがいるようだ。この目に見えないお化け集団を、一つにまとめて「徴発性」と呼んでみよう。近代技術社会は普通に写真をとれば、工場や自動車やコンピュータは映るかもしれないが、その本質の映るレンズで見れば、徴発性というお化けが一人歩きしている光景なのだ。(…)近代技術社会は徴発性(ゲ-シュテルGe-stell)というお化けにとりつかれ、引き回されている(加藤、2003、p.18)。

ハイデッガーは、このゲ-シュテルという現代技術の本質によって、まさに人間は用象として調達され、そのように挑発された者として、ゲ-シュテルの本質領域のうちに立っていると述べる（ハイデッガー、2013, p.42）。

不伏蔵的なものがもはやけっして対象として人間にかかわることなく、もっぱら用象としてのみかわり、対象を喪失したところ〔das Gegenstandlose〕の内部において人間がいまやかろうじて用象を用立てる者であるにすぎないようになるやいなや、——人間は断崖の縁のぎりぎりのところに行くことになる（ハイデッガー、2013, p.48）。

ゲ-シュテルの支配〔Herrschaft〕は、「いっそう根源的な開蔵へと参入することと、そのようにしていっそう原初的な真理の語りかけを経験することとが人間にたいして拒まれるかもしれないという可能性をもって脅かすのである」（ハイデッガー、2013, p.51）。ゲ-シュテルが支配する領域において、人間存在は単なる用象となり、真理への道を閉ざされる。このような意味において、ゲ-シュテルが支配するところには最高の意味で危険〔Gefahr〕があるのである（ハイデッガー、2013, p.51）。

こうした、ゲ-シュテルの支配による危険に対し、ハイデッガーは「しかし、危険のあるところ、救うものもまた育つ」というヘルダーリンの言葉を引用し議論を進める。そもそも「救う〔retten〕」は、本質をその本来の輝きにもたらすことである。したがって、技術の本質としてのゲ-シュテルが最大の危険であり、同時にヘルダーリンの言葉が真実であるなら、技術の本質としてのゲ-シュテルは救うものの成長をそれ自体のうちに蔵しているに違いない（ハイデッガー、2013, pp.51-52）。

ではどのようにして、危険のあるところに救うものもまた育つのか。ハイデッガーは「本質〔Wesen〕」という言葉の意味に着目し、それが動詞

の「存続する〔wesen〕」からの派生語であることを踏まえ、それを「類〔Gattung〕」という通常の意味ではなく、「存続〔währen〕」、さらには「永続するもの〔das Fortwährende〕」として捉えようとする。そして、かつてゲーテが「永続する〔fortwähren〕」の代わりに「叶えつづける〔fortgewähren〕」という表現を用いたことに着目し、「本質」を「叶えられたもの〔das Gewährte〕」という概念と結びつける。この叶えるものが、それ自体救うものである、というのである（ハイデッガー、2013, pp.53-58）。

そして、技術の本質としてのゲ-シュテルの両義性を指摘する。すなわち、第一に、ゲ-シュテルは用立てることが荒れ狂うように挑発し、真理の本質への関連を根底から危うくする。一方で、ゲ-シュテルは、それ自体の方から叶えるものとして、真理の本質を保護する〔Wahrnis〕ために必要とされるものである、という点において人間を存続させる。技術への問いは、両者の相互関係への問いである。そして人間の省察〔Besinnung〕こそが救うものと危険との親縁性を熟慮できるというのである（ハイデッガー、2013, pp.60-62）。

そして、原初的に叶えられた開蔵が、危険のただなかにおいて救うものを最初の輝きにもたらすことをなしうるのではないか、と述べ、先述のテクネー、ポイエーシスの概念に立ち返る。古代ギリシャにおけるテクネーは、真なるものを美しいもののうちに取り出すことを意味した。ギリシャにおける諸芸術は開蔵の最高の高みであった。それは単にテクネーと呼ばれた。そしてテクネーはポイエーシスに属するものであり、ポイエーシスはポエジー〔die Poesie〕さらには、「美しいものにかかわるあらゆる芸術をくまなく支配するあの開蔵」、すなわち詩人的なもの〔die Dichterische〕の概念につながるものである（ハイデッガー、2013, pp.62-64）。

そして、詩人的なものによって十全に存続させられるのは、あらゆる芸術であり、すなわち本質を発揮しつづけているものを美しいものへと開蔵

するあらゆるしかたである、と言い、以下のように述べて議論を締めくくるのである。

だが、われわれは驚く〔erstaunen〕ことならできる。なにに直面してか？いつの日にかあらゆる技術的なものを貫いて技術の本質が、真理の出来〔Ereignis〕においてその本質を発揮する日まで、いたるところで技術の荒れ狂いが用意されるというもうひとつの可能性に直面してである。

技術の本質はけっして技術的なものではないのだから、技術への本質的な省察と、技術との決定的な対決とは、一方では技術の本質に親しいが、他方ではそれと根本的に相違するようなひとつの領域で生じる。

そのような領域が芸術である。もちろんそれが言えるのは、ただ芸術的な省察がそれ自体のほうから、われわれが問うている真理の相互関係にたいしてそれ自体を閉ざさない場合だけだが（ハイデッガー、2013, pp.65-66）。

#### IV 仕事と遊戯性

前節において、われわれは、ハイデッガーの難解な技術論を読み解いてきた。そのあらましを述べるならば以下ようになる。ハイデッガーによれば、技術の本質は伏藏性が不伏藏性に至る開藏である。だが、現代技術において開藏は、あらゆるものを用象として用立てるゲ-シュテルという形をとって現れる。人間存在は、ゲ-シュテルによって用立てられることで真理への道を閉ざされる、という意味で危険にさらされる。こうした危険に対する唯一の救いは、テクネー、ポイエーシスという開藏の原初的な形態に関わる詩・芸術の領域である。技術への問いは、両者の相互関係への問いなのである。

さて、改めて冒頭のコーリーの事例およびそれが象徴する障害者雇用の問題について考察してみよう。本稿の前半部分において、われわれはリガウアの達成原理を参照し、それがコーリーを排斥するチームメートの親たちの行動や、企業における一方的な経済性追求に通底するものであると考えた。こうした達成原理が浸透した現代スポーツおよび現代企業の経済性追求活動は、まさに現代技術の本質としてのゲ-シュテルの領域において生じるものであろう。そして、あらゆるものが用象として用立てを要請されるゲ-シュテルの支配の中では、障害者は用立てられないもの、すなわち「役立たず」の烙印を押され排斥される「危険」に晒されることになる。

こうした危険に対する「救い」を、われわれはあのテクネー、ポイエーシスの概念に求めることができるだろうか。以下では、思想家の今村仁志の議論を手掛かりにそうしたかすかな企てを試みたい。

今村は、未開社会、古代ギリシャ、西欧中世および近代の労働観を比較し、近代の労働観の批判的考察を試みている。それによれば、近代の労働観と前近代のそれとの間には明確な断絶がある。すなわち、前近代は労働に対して徹底的に否定的であり、一方で、近代において労働は肯定的に捉えられその社会的地位が格上げされたのである。今村は、前近代の「格下げ」的労働観の背後にある思想的背景を明らかにすることによって、近代の労働観への批判的省察が可能であるとする。そして古代ギリシャの社会観に基づいて、労働〔labor〕と仕事〔work〕を区別する。

労働とは、「人間が自然的＝生物的存在であるがゆえに、必ず（必然的に、余儀なく）おこなわねばならない生命的活動である。生物体であるかぎりでの人間が生物的に生きるためにおこなわねばならない活動が労働であるのだから、労働は何よりもまず自然必然性に束縛された活動である」（今村、1988、p.174）。ここから、労働は基本的に奴隸的労働であるという視点が生まれる。

一方、仕事とは、「古代ではテクネーないしポイエーシスとよばれ、道

具制作的活動であり、道具を利用して、消費財と異なる耐久的事物をつくる」ことである。「仕事はポリスの生活の基盤をつくる」のであり、「奴隸的労働とちがって、アレーテイア（隠されていないこと、真理の光）と直結している」（今村、1988、pp.176-177）。

このギリシャ的な区別を基礎にして、今村は、社会主義的な「労働の解放」ではなく、「（奴隸的）労働からの解放」を主張する。そして、「奴隸的労働と自由な活動はあくまで対立する。労働は他の何ものと結合されなければ、自由な活動への転換はありえない。この性質転換のための蝶番となるのが遊戯性である」と、労働から遊戯への連関的な移行を指摘し、改めて、遊戯性と結合した「労働」を「仕事」と規定する。そして、「人間的な諸活動が奴隸的性格を離脱し、狭義の必然的労働すらその労働的性格を離脱し、遊戯性をエーテルとした自由な活動（古代のプラークシス）へと転換することこそ、たとえ現在ではユートピアであっても、手放すことのできない理念たりうる」と主張するのである（今村、1988、pp.213-215）。

この今村の議論における労働／仕事の関係を、ハイデッガーにおけるゲ-シュテル／テクネー、ポイエーシスの関係と相似的に捉えることは拙速のそしりを免れないかもしれない。だが、ポイエーシス（今村のいう仕事）の概念を考察するにあたり、彼が遊戯性という観点をもち込んだことは注目に値する。

そもそも、「遊戯」すなわち「遊び」は「労働」や「仕事」と対立する概念と捉えられることが一般的であろう。そうした観点からすると、遊びを労働と結合させるとか、遊びによって労働が仕事に転換する、とかいった議論はナンセンスに思われるかもしれない。しかし、ここで言われているのは「遊びそのもの」ではなく「遊戯性」である。そのことを理解するために、以下では「遊び」と「遊戯性」の違いについて考察していく。

遊びの概念について考察する際に一般に参照されるのは、ホイジンガと

カイヨワの議論である。オランダの文化史家ヨハン・ホイジンガは、主著『ホモ・ルーデンス』において、遊びの形式的特徴を以下のように定義した。

その外形から観察したとき、われわれは遊びを総括して、それは「本気でそうしている」のではないもの、日常生活の外にあると感じられているものだが、それにもかかわらず遊んでいる人を心の底まですっかり捉えてしまうことも可能な一つの自由な活動である、と呼ぶことができる。この行為はどんな物質的利害関係とも結びつかず、それからは何の利得も齎されることはない。それは規定された時間と空間の中で決められた規則に従い、秩序正しく進行する。またそれは、秘密に取り囲まれていることを好み、ややもすると日常世界とは異なるものである点を、変装の手段でことさら強調したりする社会集団を生み出すのである（傍点は原文ママ）（ホイジンガ, 1973, p.42）。

このように、ホイジンガは遊びを、非日常、自由、没利害、時間空間の限定、規則、秩序、秘密、といった形式的特徴をもつ現象として捉え、法、戦争、知識、詩、哲学、芸術、といった、古今東西のさまざまな文化を通覧し、遊びをその基礎となる因子として見出そうとした。

一方、フランスの文芸批評家・社会学者ロジェ・カイヨワは、ホイジンガの議論を批判的に継承し、遊びを、「自由な活動」、「隔離された活動」、「未確定の活動」、「非生産的活動」、「規則のある活動」、「虚構の活動」と規定した。そして、アゴン（競争）、アレア（運）、ミミクリ（模倣）、イリンクス（眩暈）、という遊びの4分類を提起した（カイヨワ, 1990）<sup>3)</sup>。一般にカイヨワは、遊びをある特質をもつ具体的な活動形態として把握し、ホイジンガの理論を拡充したうえでより包括的な議論を展開している、といわれる。



しかしながら、先述した今村による「遊戯性」の議論を理解するために重要なのは、むしろホイジンガの理論の方である。以下、そのことについて、佐藤（1987）の議論をベースに説明していく。

佐藤は、カイヨワとホイジンガの理論の最大の違いとして、前者が遊びを「活動」として捉えたのに対し、後者は「カテゴリー（範疇）」として把握した、という点を強調している。彼は、ホイジンガ自身による「これまで我々の行った試みは、すでに与えられ、一般に受容された意味領域をもつカテゴリーとしての遊びから出発していた」という言葉を引き、「カテゴリー」の方法的意義を説明する。

われわれがある用語をカテゴリーとして用いる場合、それは純粋な意味そのものとして設定される。その点においてカテゴリーは、「木」、「音」、「走」といった、経験的な「実在」と結びついた「概念」と区別される。例えば、「男性」、「女性」といったものが概念であるとするならば、それらに対応するカテゴリーは、「男性性」、「女性性」といったものになる。経験的な次元では、「男性」と「女性」は互いに対立している。しかし、例えば、「男性」を「気が強い」とあるとか「筋力が発達している」といった属性において捉え、それを純粋な意味として自立させて「女性」の中にその属性を見出せば、「男まさりの女性」（男性性と結合した女性）といった語法も成立するのである<sup>4)</sup>。ホイジンガはまさに、「遊び」という用語を上記のような「カテゴリー」として捉えることで、さまざまな文化事象を分析するための装置として設定している、と佐藤は主張するのである。

こうした観点から、上述の今村による労働、仕事、遊戯の議論を再検討してみよう。概念⇔カテゴリーという峻別に則るならば、通常の意味で用いられる「遊び（遊戯）」は概念であり、今村の言う「遊戯性」がカテゴリーである、ということになる。従って、彼の言う「仕事」とは、「遊戯性と結合した労働」すなわち、ホイジンガの言う、非日常、自由、没利害、時間空間の限定、規則、といった、遊びの属性と結合した労働、というこ

とになるだろう。

では、こうした仕事の概念は、実際の障害者雇用の現場においてどのような有効性をもつだろうか。ここでは、その可能性が垣間見える有限会社真京精機の事例を紹介しよう<sup>5)</sup>。

栃木県真京市に本社を構える真京精機は、1974年創業の精密部品切削加工会社である。創業当初は自動車部品を主に扱っていたが、取引先の海外拠点の拡大、部品の海外調達への移行により、2005年には売上高は最盛期の50%にまで落ち込んでしまう。社員の士気も低下し、男性社員の多くはより単価の高い他社へと転職、50人いた社員は16人にまで激減してしまう。残った社員の多くは障害者や高齢者だった。

こうした状況を改善するために同社が行った改革の一つが、障害をもつ残った社員を、作業環境の工夫、きめ細やかな業務分担、臨機応変なワークシェアリングによって、退職していった社員に代わる主戦力として育成することであった。それまで同社では、障害者は主に掃除などの軽作業に従事してきた。障害の種類は、知的障害が9割を占める。社員の激減を受けて彼らを製造の現場に配置、同社の専務を中心に根気強くマンツーマンで指導したところ、少しの工夫で他の社員と同様の仕事ができること、さらに他の社員と比較しても勤務態度が真面目であることが明らかになった。各人の特性を知った上で、それに合わせて業務を創出し、本格的な戦力としての活用を目指したのである。

障害者の活用にあたり最も注力したのは環境整備であった。業務マニュアルは、ひらがなやカタカナによる表記、図や写真の多用により、知的障害者が苦手とする曖昧な表現を排し、左利きの社員には左手で作業をしている写真を示すなど、一人ひとりに合わせて作成した。治具や設備に関しても、部品の向きを間違えないよう、一定の向きでしかセットできないようレバーで固定する装置、部品にゴミが入っていたらブザーで知らせる装置、機械の高さに合わせて調節できるイスを準備し、倒れやすい3本脚を

4本脚に改造するなどして対応、油で滑りやすいレンチは長さを変え、テープを巻いて改造する、といったさまざまな工夫を凝らした。これらの治具は、外注すると使用者の特性を踏まえきれない失敗作も多かったため、ほとんどは現場の社員により内製された。

また、障害をもつ社員を無理なく作業できる業務に配置し、成功体験を味わうことで仕事の喜びを実感できるような環境づくりも行われた。正社員として責任ある立場を与えると、そのことが負荷となってしまうケースがあるため、敢えて全員をパート社員として雇用し、その分、勤務時間は各自に合わせてフレキシブルに設定した。また、離職した社員も、意欲さえあれば何度でも受け入れた。一方で、健常の社員との関係性を築くため、社内のバーベキュー大会や忘年会などの親睦行事の場で社員間の交流が頻繁に行われたことで、社全体の一体感の醸成にも役立ったという。

こうした障害者の労働環境の整備を含むさまざまな改革により、安定した生産体制が構築され、2005年の債務超過の状態から2年後の2007年には早くも黒字化、以降コンスタントに売上高、利益を上げている。また、障害者向けに開発した治具活用の効果が全社に及び、不良品率がほぼゼロとなったこと、障害者の高度活用を通じた社員全体の適材適所の徹底や業務プロセスの見直しにより、週労働時間が60時間から44.5時間に削減されたことなど、障害者雇用が会社全体の利益につながっていることが分かった。

さて、この真京精機の事例に、労働に遊戯性が結びつくことによる「仕事化」の実現が見て取れないだろうか。上述したように、遊戯性は「非日常」、「自由」、「没利害」、「時間空間の限定」、「規則」、「秩序」といった属性をもったカテゴリーであった。このことを踏まえると、例えば、知的障害者のために作成された業務マニュアルは、曖昧さを配した「規則」性をもったものであり、彼らのために開発された治具や設備と共に、その業務に安定した「秩序」をもたらしたと言える。また、パート社員としての雇用によりフレキシブルな勤務時間が可能となったことは、サービス残業に

代表されるような曖昧な時間管理を排した、まさに「時間空間の限定」により従業員の「自由」が増した、と捉えることができる。バーベキューや忘年会という「非日常」のイベントが、社全体の一体感の醸成に役立ったという点もまた、「仕事化」による効用と言えるだろう。

そして、こうした「仕事化」の効用は、障害者雇用の問題だけに関わるものではない。例えば、過労による健康被害が問題となる中で、フレキシブルな勤務形態による自由な時間の増加は、一般従業員のQOLの向上に繋がるだろう。また、外国人労働者の増加など、多様な人々による協働が不可避となっていく中で、今後は「何となく伝わるだろう」といった曖昧なコミュニケーションは成り立たなくなっていく。それに対して、明確な規則性をもったコミュニケーションのシステム作りや、非日常のイベントによる一体感の醸成といったことが、一層重視されることになっていくだろう。このように、労働の仕事化は、社会全体の労働環境をドラスティックに改善するための契機となるものである、と考えられるのである。

## V サッカーにおける遊戯性

前節では、今村やホイジンガの議論を参照し、労働と遊戯性が結びついた「仕事」の概念を、障害者と健常者の協働が可能となる労働環境の実現のための契機として提示した。もちろん、議論の中で言及した真京精機の成功例は、ただちに一般化できるものではない。特に、職場環境の改善が比較的容易な中小企業の事例が、多数の従業員を抱える大企業にそのまま応用可能であるとは考えにくい。大規模な職場の中にごく少人数の障害者が働く中では、上述したさまざまな取り組みが一朝一夕に実現することは難しいだろう。そのためには、現場において実現可能な方法論の詳細な分析が必要である。

さて、その問題については一旦わきに置き、本節では今後の研究のヒン

トとなるような考察を、本稿前半の議論に立ち戻って別の角度から行いたい。先の議論において、われわれはハイデッガーの技術論を参照した。その中で、ハイデッガーは現代技術の本質に存するゲ-シュテルと、それに対する救いとしてのテクネー、ポイエーシスに言及し、それを詩作の領域と結び付けて捉えたのであった。

実は、あのホイジンガもまた、詩作に関する分析の中でポイエーシスに言及し、それを遊びの概念と結びつけて考察している。

(…) 詩的創造の本質とは何かと問うのが望ましいことだと思う。  
(…) 詩をつくるということは、これも初めは遊びの領域に生まれたものでありながら、いまなお依然としてその領域の内部に踏みとどまっているからである。詩作（ポイエーシス）とは一つの遊びの機能なのである。それは精神の遊びの空間の内で行われる。精神が自らのために創った固有の世界で営まれている。そこでは物事は「日常生活」のなかでは異なった相貌を帯び、ものどものとが論理や因果律とは別の絆によって結び合わされる。もし、真面目ということを、目覚めている生命の言葉のなかにはっきり断定的に表わされるもの、というふうにとらえるならば、詩はとうてい完全な意味で真面目なものと言うことはできない（ホイジンガ, 1973, pp.250-251）。

詩作は元来遊びの領域に生まれたものであり、日常生活における論理や因果律の根底にある「真面目さ」から解き放たれた営みである。言い換えるなら、詩作とはまさにそうした「真面目さ」を相対化する遊戯性を伴った営みであるということになるだろう。このような意味での遊戯性は、そもそも現代社会の根本においてわれわれを駆り立てる達成原理やゲ-シュテルの支配に対して、一つの救いとなる可能性を秘めたものではないだろうか。

人類学者の今福龍太は、ホイジンガの遊戯論を自身のサッカー批評に接続する。

勝敗を度外視したところにも成立しうる私にとってのサッカーは、オランダの文化史家ヨハン・ホイジンガが「ルドゥス」（スポーツにおける遊戯性の本質）と呼んだような快楽の相をもったものとしてある。とりわけブラジルをはじめとするラテンサッカーのなかに、このルドゥスという人間の本能的な遊戯性と快楽の美学がいまだに維持されている。

ルドゥスによって特徴づけられる身体がどのようなものであるかは、逆に近代スポーツによる勝利至上主義的な訓練のもとにつくられた身体がどれほどに画一的でノッペラボウであるかを見ればよい。近代サッカーは、選手の身体を画一的な「動く駒」へと置き換えることで、チームにおける戦術の選手への徹底をはかった。そうした戦術的なサッカーにおいては、一人の選手が突出した身体性を発揮することは、かならずしも好ましいことではなくなる。個人技よりもチームワークが優先されるのが今日のサッカーなのだ。たとえばドリブルのような個人プレーは、いまや短いボールタッチですばやくパスを回していく集団的・合理的サッカーの台頭の前ですっかり影が薄くなってしまった（今福、2001, pp.105-106）。

こうした、画一的な身体性に基づく集団的・合理的サッカーの対極に位置づくものとして、今福はマラドーナやジーコ、ソクラテスといった卓越した個人技によって観衆を魅了した伝説的プレーヤーを取り上げ、彼らの身体に「遊戯的・快楽的身体性」を見て取る。

そして、彼がそうした身体性の象徴として捉えるのが、ガリンシャである。1950年から60年代にかけて、ブラジルのサッカー選手として活躍した、ガリンシャ（本名：マノエウ・フランシスコ・ドス・サントス）は、ブラ

ジル代表として2度のワールドカップ制覇に貢献し、ポジションはフォワード（右ウイング）であった。20世紀最高のウイングの1人とされ、トリッキーなドリブルで注目を集め、サッカーの王様ペレと並び称されるほどの存在であった。家は貧しく、6歳で小児麻痺にかかった時、十分な治療を受けることはできなかった。結果、背骨はS字に歪み、左右の足は異なる長さでねじ曲がり、軽度の知的障害が残ることとなった。

現代日本社会のカテゴリーによるならば、ガリンシャの身体は障害を抱えたものであり、近代サッカーの勝利至上主義が求める合理性・組織性とは相容れない存在であろう。もちろん、ガリンシャの身体は当時において卓越した技能やスピードを兼ね備えたものであった。だが、現代サッカーはかつてと比較にならないほど高度に科学化、情報化しつつある。例えば、選手のプレーは逐一モニターされ、どういう動きをしてきたかがデータ化され蓄積されている。選手の走行距離やパスの回数まで自動的にカウントされるICチップを埋め込んだスパイクすら開発されているという。そして監督、コーチ、選手自身の判断ではなく、あくまでもデータに基づいた戦術が組み立てられ、選手交代のタイミングすらデータ分析の結果に基づいて行われるようになりつつある。2014年のW杯準決勝でブラジル代表を大差で破ったドイツ代表は、まさにそうした高度化したサッカーの頂点を極めたチームであった。このように高度化した現代サッカーのあり様は、われわれに達成原理やゲ-シュテルの支配を想起させる。こうした領域において「障害者ガリンシャ」の出る幕はないだろう。

だが、今福は、ガリンシャのプレーに、そうした高度に勝利を志向するサッカーとは異なる契機を見て取るのである。

(…) ガリンシャのプレーに酔う民衆の歓喜の表情はサッカー競技のスペクタクル性を支える最大の要素の一つである。だがここでガリンシャを包み込む観衆の集合的な感情は、ガリンシャという一人の選手に

向けられているというよりは、観衆一人一人の内部に棲む自己の分身である何者かに向かって発せられたシグナルのように感じられる。生まれつき曲がった不具の脚をアクロバティックで変幻自在のドリブルやフェイントに活用しながら右サイドから切り込んでいくガリンシャの姿を透視しながら、その先に人々はいったい何をのぞき込んでいるのだろう。サッカーを超える何かに、このとき人々がひたされていることは疑いようがないのだ（今福，2001，pp.184-186）。

当時のブラジルの大衆が彼の身体に見たものは、そうしたサッカーの在り方を超越する遊戯性なのである。こうした遊戯性への志向に関する問いを深めることで、障害者と健常者の協働においてわれわれが直面する困難に対し、何らかの示唆を与えることができるのではないか。

## VI 結語

本稿では、現在の障害者雇用をめぐる問題を改善するための出発点として、それに関わる4つの根本的な概念についての考察を行なった。

まず、雇用された障害者が担うことになる営みの「目的」について、スポーツをメタファーとして考察した。車椅子のチャリダーの事例から出発した「目的」についての議論は、〈より速く、より高く、より強く〉を志向する近代スポーツと、より高度な経済性を追求する企業活動とに通底する目的としての「達成」の原理へと導かれた。

次に、そうした達成の背後にある「技術」の問題を考察するため、ハイデッガーの技術論の検討を行なった。現代技術はあらゆるものを用象として用立てるゲ-シュテルという形をとって現れ、人間存在もまた、ゲ-シュテルによって用立てられることで真理への道を閉ざされる、という意味で危険にさらされている。ハイデッガーは、こうした危険に対する唯一の救



いが、テクネー、ポイエーシスという詩・芸術の領域である、と述べた。

この議論を踏まえ、次にわれわれは、今村による「仕事」の概念とホイジンガにおけるカテゴリーとしての「遊び」について考察を深めた。今村は古代ギリシャの労働観を検討する中で、前述のテクネー、ポイエーシスを近代の労働と対立する「仕事」として捉え、労働が仕事へと転換するための鍵となる「遊戯性」に言及した。われわれは、それをホイジンガの遊戯論におけるカテゴリーとしての「遊び」と捉え、それが仕事に結実した事例として有限会社真京精機における障害者のための労働環境改善の取り組みを紹介した。

最後にわれわれは、サッカーの元ブラジル代表のガリンシャの例を引き、遊戯性が、障害者雇用の困難性の要因となる達成原理やゲ-シュテルを相対化し、障害者と健常者による真の協働を実現する手掛かりとなる可能性を提起したのである。

本稿の議論により、職場における障害者と健常者の協働を促進するための糸口を示すことができたであろう。一つは、遊戯性を契機とした「労働の仕事化」による職場環境の改善である。真京精機は、障害者用の業務マニュアルやフレキシブルな雇用形態の確立などにより、障害者の主戦力としての活躍を可能にし、結果として社の業績を改善していった。こうした成功例は、協働を可能にするための一般的な職場環境づくりに向けての重要なヒントとなるだろう。もちろん、上述したように、真京精機のような中小企業の事例が、多数の従業員を抱える大企業にそのまま応用できるわけではない。企業規模の大小を超えて適用可能な一般的な方法論の確立のためには、実地における詳細な分析が必要であろう。この点は今後の研究の課題となる。

もう一つは、ガリンシャの事例にみた遊戯性のもう一つの可能性である。障害者である彼の活躍を可能にした当時のブラジルのサッカーは、現代においては集団性・合理性を追求したサッカーに敗北を喫してしまうだろ

う。このことは、障害者の活躍を可能にする「仕事化」を行った企業が、従来の「労働」を重視する集団化・合理化を徹底した企業の後塵を拝する、といった事態をわれわれに想起させる。

確かに、現代的な勝利至上主義のサッカーにおいては、遊戯性を内在したブラジルサッカーは頂点を極めることができないかもしれない。だが、ガリンシャのサッカーが当時のブラジルの観衆に熱狂をもって受け入れられたという事実は、単なる集団化・合理化の徹底による経済性追求を相対化する視座をわれわれに与えはしないだろうか。この問いに対する答えを追求するために、われわれは更なる考察を進めていく必要がある。

〔謝辞〕本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究（A））「高齢・障害者の雇用政策・差別禁止法の効果研究：組織における人間行動の影響への着目」〔17H01000〕（研究代表者：高木朋代）の成果の一部である。高木朋代先生（敬愛大学）ほか、佐藤邦政先生（敬愛大学）、渡正先生（順天堂大学）、清野絵先生（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）、Nora Gilgenさん（チューリッヒ大学大学院）には、研究発表の場で貴重なコメントをいただいた。この場をかりて感謝申し上げる。

## 注

- 1) 以下、同講演の内容に関しては、関口の訳によるハイデgger（2013）を参照する。
- 2) Ge-stellの訳語について、関口は「集-立」としているが、以下に引用する加藤の訳との兼ね合いから、本稿では「ゲ-シュテル」と表記する。
- 3) カイヨワは各類型の具体例を以下のように示している。運動競技や玉突き、チェス（アゴン）。じゃんけん、賭け、富くじ（アレア）。子供の物真似、空想の遊び、演劇（ミミクリ）、メリ・ゴー・ラウンド、ぶらんこ、登山（イリンクス）（カイヨワ、1990、p.81）。
- 4) もちろん、このような男性性の捉え方は決して普遍的なものではない。筆者は説明のために敢えてステレオタイプの表現を用いている。
- 5) 以下、同社の事例の解説については、ダイバーシティ経営企業100選企業.indd（2016）を参照した。

## 参考文献

- カイヨワ：多田道太郎・塚崎幹夫訳（1990）遊びと人間．講談社，pp.30-81.
- ダイバーシティ経営企業100選企業indd（2016）有限会社真京精機．[https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/diversity/kigyol100sen/practice/h27\\_pdf/06\\_.pdf](https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/diversity/kigyol100sen/practice/h27_pdf/06_.pdf)，（参照日2019年4月20日）．
- ハイデッガー：関口浩訳（2013）技術への問い．平凡社．〈Heidegger, M. (1954) Vorträge und Aufsätze. Neske.〉
- ホイジンガ：高橋英夫訳（1973）ホモ・ルーデンス．中央公論社．
- 今福龍太（2001）フットボールの新世紀：美と快楽の身体．廣済堂出版．
- 今村仁司（1988）仕事．弘文堂．
- カント：篠田英雄訳（1961）純粹理性批判（上）．岩波書店，p.124.
- 加藤尚武（2003）ハイデガーの技術論．理想社．
- 毎日新聞（2018）障害者雇用水増し：省庁28機関3700人 第三者委報告．（10月22日夕刊）．
- 内閣府（2013）障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律．第一章 総則（目的）第一条．[https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/law\\_h25-65.html](https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/law_h25-65.html)，（参照日2019年4月13日）．
- Rigauer, B. : Trans. by Guttman, A. (1981) Sport and work. Columbia University Press.
- Sandel, M. J. (2009) Justice: What's the right thing to do? Farrar, Straus and Giroux.
- 佐藤臣彦（1987）遊びとは何か．中村敏夫・高橋健夫編，体育原理講義．大修館書店，pp.45-55.